

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

- 日本語ボランティアグループと島根大学の連携の必要性について -

松田みゆき

(法文学部言語文化学科)

The present Japanese language education in Shimane University
and some related problems

A report on the necessity of a close connection between
volunteer Japanese educational groups and Shimane University

Miyuki Matsuda

The author has executed interview and questionnaire researches into three volunteer groups working on Japanese education in Matsue region. In this report, the present Japanese education for foreign students in Shimane University and some problems occurring in it will be overlooked in the first place, following the result of the researches. The necessity of a close connection between the university and the volunteer groups will be discussed after.

The foreign students of Shimane University have several opportunities of learning Japanese in Matsue region, not only in the campus but also in other places. In the viewpoint of the lecture time, it was turned obvious by the researches that three quarters of Japanese classes are given by the volunteer groups. The role of the volunteer groups was especially important in the Japanese classes for the foreign students in the introductory and basic Japanese levels, 70% of all. Participants in the volunteer groups in Matsue region are, thus, powerful supporters for the foreign students in the university. It should also be noted that the participants themselves are students to learn throughout life-time long. They have to learn many matters involving knowledge and lecturing techniques for Japanese education ranging over various fields. The chances of training for such purposes, however, were turned out by the researches not sufficiently supplied for them, although many of them want to have such kind of opportunities. This is the first generalized report on the demand of the participants in the volunteer groups of Japanese education in Matsue region. It seems very important for the university to give such opportunities to them in building up a more close relationship with the volunteer groups. Some concrete possibilities on a close connection with the volunteer groups as well as the Japanese education in future will be discussed and overlooked.

はじめに

筆者は平成13年度前期から、島根大学留学生（以下留学生）に対して「日本語・日本事情に関する科目」を島根大学法文学部非常勤講師の立場から講義する機会を得た。また筆者は、留学生に対する学外での日本語教育に平成12年から携わる一方、日本語ボランティア（以下V）研修会

松田みゆき

の講師等としても活動してきた¹⁾。留学生に対する日本語教育を学内と学外の両面から同時に見る機会を得た結果、学内外の日本語教育の連携が必ずしも円滑に行われていないことを意識させられる場面に筆者は何度も遭遇した。そこで今回、この問題を詳しく分析する目的で、留学生に対して現在行われている学内外の日本語教育の現状調査を行った。そしてさらに、松江地域で日本語 V 活動を行っている三つのグループに対して聞き取りとアンケートによる調査を行った。それらの結果を踏まえて本稿では、先ず学内外の日本語教育の現状とその問題点を概観する。次に、日本語 V グループと島根大学の連携の必要性について詳しく述べる。

現在、留学生が松江地域において日本語教育を受ける機会は、大学内だけでなく大学外にも存在している。今回の調査の結果、開講時間の点から計算すると日本語講義等の実に4分の3が学外の日本語 V グループによって実施されている現状が明らかになった。特に留学生の約7割を占める日本語入門・初級レベルの留学生の日本語教育に対しては、日本語 V グループの果たしている役割が非常に大きいことが分かった。このように、松江地域の日本語 V は、留学生にとって地域の有力なサポーターである。その一方で日本語 V には、V 活動のために自らも学習する生涯学習者であるという一面もある。日本語 V の学習すべき事項は、日本語教育のための知識や教授法にとどまらず多分野に及んでいる。しかし、そのための研修の機会は必ずしも多いとは言えず、日本語 V が学習の機会を切望していることが今回の調査により明らかになった。こうした生涯学習の機会を島根大学が提供することは、島根大学と V グループとの連携を深める上で重要であると考えられる。島根大学に可能な日本語 V との連携について具体的に提言し、今後の留学生の日本語教育について展望したい。

I : 留学生の日本語学習の機会

島根大学では、留学生用科目として、学部に「日本語・日本事情に関する科目」が用意されている。平成14年1月1日現在、島根大学には153名の留学生が在籍している。そのうち、上記の正規日本語授業の履修資格を持つ学生は、学部学生、特別聴講生、及び科目等履修生である(37名²⁾)。これ以外の大部分の留学生(大学院生、研究生)が日本語学習を希望する場合には、島根大学が正規授業の他に実施している日本語補講や学外の V による日本語教室において日本語教育を受けている。

留学生の日本語教育は基本的に島根大学の責任によって行う必要があるが、現状では学内だけで充分に対応し切れているとは言いがたい。むしろ現実には、学内の留学生の日本語教育を補完する形で日本語 V グループが機能しているという実態が今回の調査によって明らかになった。この章では留学生の日本語教育の現状を報告する。

1 . 留学生のレディネスとニーズの多様性

日本語を学びたいと望む留学生は実に多様である。それは、留学生受け入れの際の様々な身分とその選考過程に違いがあるために、学生の日本語学習歴、学習目標、日本語運用能力に大きな違いがあることに起因する。留学生の母語、所属学部、滞在期間、勉学活動に日本語を使用するか否か、日本語能力試験受験を希望するか否か、家族がいるかどうか、等の要素も日本語教育に

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

おけるレディネスとニーズの多様化の原因となっている。

留学生のレディネスに関する問題点は、主に姉妹提携校から来る留学生の日本語能力不足について既に平成6年の段階で学内からも指摘されている³⁾。その際に、日本語・日本事情に関する授業科目以外に留学生用の特別の授業科目が設けられていないこと、そして、特に研究生については、入学時に大学の講義を理解できる程度の日本語能力を持つことが前提とされていることもあって、日本語・日本事情等の指導体制が整っておらず、ほとんど全てが指導教官の裁量に委ねられているという、留学生指導体制に関する問題点が重ねて指摘されている⁴⁾。こうした問題点は、現在でもほとんど改善されていない。

2. 日本語学習の機会

島根大学の講義（正規授業と日本語補講）と、学外の日本語Vグループによる日本語教室（松江地域のV日本語教室）の講義時間を集計した（図1）また、これら日本語講義等を「正規授業」「日本語補講」「松江地域のV日本語教室」の各々で分類し、受講者種別の分布を分析した。その結果を図2⁵⁾、3、4に示した。これらの結果を踏まえて、以下に留学生の日本語学習の機会別に順次述べる。

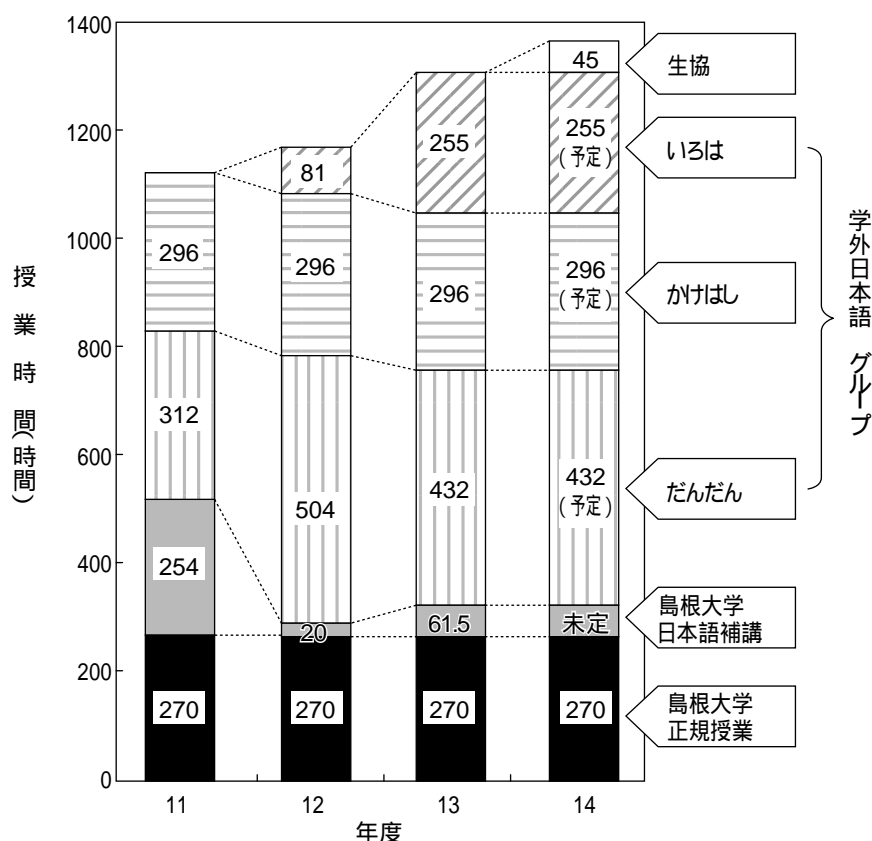


図1：島根大学留学生が松江地域で受講可能な日本語講義等の種類と開講時間

松田みゆき

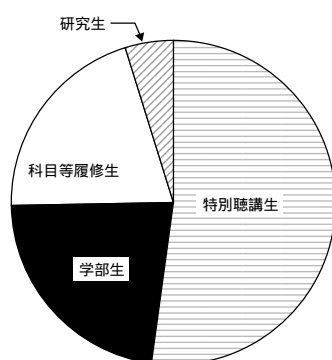


図2：島根大学の日本語正規授業（平成13年度）の受講生内訳
留学生総数（130名）

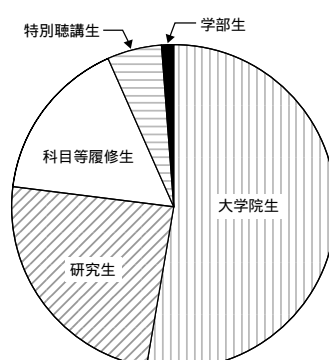


図3：島根大学の日本語補講（平成13年度）の受講生内訳
留学生総数（91名）

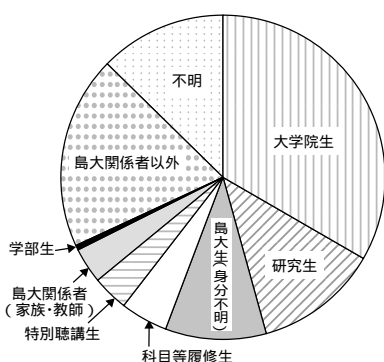


図4：松江地域のボランティア日本語教室（平成13年度）の受講生内訳
受講者総数（244名）

(1) 島根大学学内

①正規授業：島根大学の正規科目である日本語・日本事情を履修できるのは、学部生、科目等履修生及び特別聴講生である。正規の日本語授業は6クラスあり、大学において日本語を使って勉学活動を行う際に必要な日本語能力の訓練や日本語を使った学習スキル、日本事情などを学ぶコースが用意されている（表1は平成13年度の実施例である）。

表1 学習者内訳（島根大学正規授業）

授業題目 開講時期 担当教官名	日本語 ⅠA 前期 松田	日本語 ⅠA 後期 片寄	日本語 ⅠB 前期 片寄	日本語 ⅠB 後期 片寄	日本語 ⅡA 前期 松田	日本語 ⅡA 後期 松田	日本語 ⅡB 前期 松田	日本語 ⅡB 後期 松田	日本の 文化 前期 片寄	日本の 文化 後期 松田	日本の 自然 前期 増永	日本の 自然 後期 増永	計
学部生	3	0	3	3	1	2	3	5	2	2	3	2	29
特別聴講生	7	8	2	7	8	6	9	8	1	7	0	5	68
科目等履修生	4	1	1	1	4	2	4	4	0	3	0	3	27
研究生	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	6
大学院生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	15	9	7	11	14	10	17	17	4	12	4	10	130

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

全ての授業レベルが、中級後半から上級レベルの日本語能力を有する留学生対象となっている⁶⁾。これらの授業は、大学レベルの日本語教育としての質を保つために、通常日本語能力試験 1 級認定レベルの学生を対象に進める。受講者のうち、日本語・日本文化研修留学生や大学において日本語で勉学活動を行っている学部生などはこのレベルに相当する。これらの学生を本稿では、「Foreign Students 1(FS 1)」と呼ぶことにする。

その一方で、ひらがなを書くのがやっとという科目等履修生が同じ科目を履修するという事態が発生する。それは、科目等履修生受け入れの際に、日本語能力試験 1 級受験経験を要求しない学部があるためと考えられる。現在、教育学部と法文学部の科目等履修生の受け入れ条件には、日本語能力試験 1 級受験がある。これに対して、総合理工学部と生物資源科学部にはこの条件がない。本国での日本語学習が充分でない留学生の中には、先ず科目等履修生として来日し、その後正規の学部入学を目指す者がいる。そのような学生の中には、日本語能力試験受験の条件がある 2 学部を避けて、勉学対象として興味のあるなしに関わらず、条件のない 2 学部を方便として希望する者が実際に存在する。このような学生は、来日許可を本国で取得するために、授業担当教官の履修許可を来日前に得ることになる。この段階で、授業担当教官が留学生の日本語能力を測ることは現実的には不可能である。彼らに代表されるように、授業履修資格はあっても、大学レベルの日本語授業についてくることの出来ない留学生を本稿では、「FS 2」と呼ぶことにする。

また先に述べたように、島根大学の正規日本語授業を履修できる学生は、島根大学留学生の全てではない。平成14年 1 月 1 日現在では、留学生総数153名の中で正規日本語授業履修資格者はわずか37名である。残りは、大学院生(97名)と研究生(19名)である。これら大部分の学生は、大きく 2 つのグループに分類できる。一番目は、勉学・研究活動をするために十分な日本語能力を既に持っていると思われているために授業の履修資格を持たない留学生である。文系の大学院生や研究生の一部の留学生がこれに相当する(「FS 3」)。二番目は、日本語を使用した勉学・研究活動を想定していないので、日本語授業の履修資格を持たない留学生である(「FS 4」)。例えば、特別コースの大学院生は、英語による講義や研究を前提として留学しているので、選考の際に日本語能力は問われない。日本語での簡単な挨拶さえもできないまま来日する留学生もいる。そうした留学生であっても、新しい環境での勉学活動の開始と共に日常生活も始まる。日本語ができないために遭遇する困難は多いと想像される。以上のように留学生を正規授業履修資格と日本語レベルの点から分類した 4 グループの学生は、下記の表のようにまとめることができる。

表 2 正規授業履修資格と日本語レベルから見た島根大学留学生の分類

留学生の分類	正規授業履修資格	日本語レベル	学生身分など	主に受講している授業	人数
FS 1	有	中・上級	学部生 特別聴講生 科目等履修生	正規授業	約30名
FS 2	有	初級	特別聴講生 科目等履修生	正規授業、日本語補講、 学外日本語ボランティア教室	約10名
FS 3	無	中・上級	研究生 大学院生	13年度には、日本語学習の機会が 極めて少なかった。	約10名
FS 4	無	入門・初級	研究生 大学院生	日本語補講、 学外日本語ボランティア教室	約100名

松田みゆき

FS 1 の学生は、レディネス、ニーズ共に、大学の正規授業に最も適合した学生である。しかし、教官と学生のインタラクティブな活動を重視する語学学習の教室内では、FS 2 などの学生の存在が大学レベルの授業を維持遂行する上で問題となることが多い⁷⁾。

FS 3 の学生に対する日本語教育の機会はほとんど用意されていない。この現状は、前節で述べた平成 6 年当時の学内報告と全く変わっていない。FS 3 の学生も日本語教育の機会が必要であることは以下のように明らかである。日本語能力試験 1 級認定レベルの留学生であっても、十分な音声言語による訓練が不足しているため、講義の聞き取りや会話に不自由を感じる留学生は少なくない。日本語による情報収集能力や、レポートを書くための学習スキルの修得も必要である。また日常生活においても、日本文化や日本社会に関する情報が不足しているため、困難を感じる場面が多い。一方、FS 4 の学生が日本語教育を受ける必要があることは、前述のように彼らの生活上の切迫した問題である。

以上のように、FS 1 以外の留学生には、本人のニーズに適合する正規日本語教育科目は現在存在しない。彼らの数は、島根大学留学生全体の約 80% (約 120 名) に達する。留学生センターを有する比較的大規模な国立大学では、一般に彼らに対する日本語授業が十分に用意されている。しかし小規模な大学になると状況は悪化する。身近な例であるが、平成 12 年 4 月に開学した島根県立大学は総合政策学部しか持たない比較的小規模な大学であるために、正規の日本語に関する授業科目を持っていない。しかしそれを補う目的で、留学生に対する入学前日本語研修や入学後の日本語補講を実施している⁸⁾。今後も増え続けるであろう留学生に対して、国立大学が日本語教育を十分に実施することが非常に重要であるという認識は、日本語教育界では当然のことと考えられている。

では次に、島根大学で行われている日本語補講の現状について述べる。

②日本語補講：正規の授業の不足分を補う目的で、本学においても日本語補講は継続的に実施されていた。平成 8 年度以降の日本語補講の実施状況を表 3 にまとめた。

表 3 . 日本語補講実施状況 (年度学期別)

年度	8 年度 前期	8 年度 後期	9 年度 前期	9 年度 後期	10 年度 前期	10 年度 後期	11 年度 前期	11 年度 後期	12 年度 前期	12 年度 後期	13 年度 前期	13 年度 後期
実施時期	5/7 ~ 7/18	10/7 ~ 12/13	5/8 ~ 7/18	10/7 ~ 11/27	5/11 ~ 8/10	10/8 ~ 12/18	6/17 ~ 9/30	10/4 ~ 2/24	-	2/15 ~ 3/22	5/30 ~ 7/18	10/17 ~2/15
クラス数	3	3	3	3	3	3	3	3	0	1	2	2
延べ平均 受講者 総数 ^{a)}	記録 なし	記録 なし	記録 なし	記録 なし	34.9	23.0	16.1	17.3	0	記録 なし	7.3	21.3
講義 総回数	60	42	63	32	72	56	58	69	0	10	15	26
総時間	120	84	126	64	144	112	116	138	0	20	22.5	39
年度 総時間	204		190		256		254		20		61.5	

a) 延べ平均受講者総数とは、一講義当りの平均受講者数を各期に開講された全クラスで総計した数値である。

これによると、11年度までは不十分ながらも継続的に日本語補講が開講されていた。全部で 3

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

クラスの補講を毎年200時間程度実施していた。ところが12年度になると、わずか1クラス20時間に激減した。しかもその開講日が年度末であったために、補講の実施を知っていた学生は、筆者が13年度前期の時点で調べた限りいなかった。12年度には、日本語能力の不足している留学生達が、多くの困難を経験したと想像される。前項に述べたような経緯から日本語補講の必要性は明らかであったので、日本語の講義を13年度から新たに担当することになった筆者は、補講を企画することにした。13年度に実施できた補講は2クラス61.5時間であった。開講時間は11年度までと比較して少なかったが、学年当初より補講の必要性を粘り強く主張し続けた結果、留学生係のご努力によって5月から実施することができた。期間は短かったが、比較的効果的に実施できたことは幸いであった⁹⁾。多くの留学生たちも補講が実施できたことをとても喜んでくれた。

表4. 学習者内訳 (島根大学補講)

	前期		後期		計
	水曜日 初級	金曜日 初級	入門	1級 対策	
学部生	0	0	0	1	1
特別聴講生	1	1	2	1	5
科目等履修生	3	3	1	8	15
研究生	7	7	5	3	22
大学院生	8	9	21	9	47
計	19	20	29	22	90

次に、13年度に実施した補講の詳細について述べる。以下に述べる状況から判断して、13年度前期には初級2クラスを開講した。すなわち、学年暦の関係から留学生の来日は秋に集中している。このため前期には、入門より少し進んだ初級クラスが適当と判断した。日常生活で直ちに必要な会話の他に、初級文法を使って「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく訓練することを目標とした。この補講は、FS2と4を対象として実施した。実際に補講を受けた留学生の大部分が科目等履修生、研究生、大学院生であったことから、初級2クラスを開講したことは有効であったと思われる(表4参照)。

後期には2クラスを開講した。一つ目は、来日直後の留学生のうち母国で日本語学習経験のない留学生を対象とした入門クラスとした。これは、主にFS4を対象とした。二つ目は、毎年12月に実施される日本語能力試験1級受験を目指す留学生のための試験対策クラスとした。このクラスは、島根大学への正規入学のために日本語能力試験1級を受験しようとしている科目等履修生や研究生を対象にして開講した。しかし、日本語学習の機会を求めて、既に日本語能力試験1級に合格している留学生も2名受講した。これら2名の留学生は、FS3に相当する留学生であった。島根大学内において正規の授業にも補講のいずれにも日本語学習の機会がない留学生が、少しでも日本語学習をしたいと希望して、開講目的が本人のニーズと合致していないにも関わらず受講したのだと推定される。

(2) 島根大学外：日本語ボランティアグループ

留学生の中には、松江地域にある3つの日本語Vグループが実施する日本語教室等で日本語

松田みゆき

学習をしている学生が多くいる。今回の調査の結果、こうした教室で学習している平成13年度の留学生の受講生は延べ158名であることが分かった。(表5)

表5. 各種日本語講義等に受講登録した外国人の内訳

	島根大学 正規授業	島根大学 日本語補講	ボランティア 日本語教室
留学生	130	90	158
島大関係者 (家族・外国人教師)	0	0	8
留学生以外の学習者 あるいは身分不明者	0	0	78

松江地域で活動している3つの日本語Vグループ、すなわち、「日本語ボランティアグループ “だんだん”」(以下「だんだん」)、「松江日本語指導ボランティアかけはし」(以下「かけはし」)、「日本語ボランティアいろはの会」(以下「いろは」)の各Vグループの設立経緯と活動内容を中心に報告する。本稿では、Vで日本語指導をしている方を全て「日本語V」その所属する団体を「日本語Vグループ」と呼ばせていただいた¹⁰⁾。

①日本語ボランティアグループ “だんだん” (会員数21名)

設立からの経緯：

平成6年10月に設立された。島根県で最も早くから日本語V活動に取り組んできたグループである。平成6年に開講された(財)島根国際交流センター主催「しまね日本語V養成講座」修了者のうち、有志10名により「日本語を教えて『だんだん』、習って『だんだん』」を合言葉に設立された。「だんだん」とは、出雲地方の地域語で、「ありがとう」の意味である。日本語を教えることを通じてVをするという「だんだん」の活動はこの互助と感謝の精神を根本に据えている。その後、平成10年の(財)しまね国際センター主催「しまね国際研修館・日本語V養成研修」修了者や個人的な参加者を加えて会員数を増やし現在に至っている。平成6年の設立当初は、島根大学留学生やその家族、外国語指導助手(ALT)などを対象とした日本語教室から活動が始まった。翌年の平成7年からは、松江市教育委員会からの要請を受けて、市内小学校の外国人子女への日本語指導も開始した。同じく平成7年からは、しまね国際研修館における研修員、研修生の日本語研修にも多くの会員が協力している¹¹⁾。

留学生が受講できる「だんだん」の日本語教室：

- a) 活動場所：くにびきメッセ2階国際交流センター会議室
- b) 活動時期：学習者のニーズを考慮すると、学期を設けることが適当でないという判断から、特に区切りを設けずに通年で実施している。
- c) クラス形態と学習者：1回15時間。6クラス。
うち、5クラスが入門・初級レベル対象。1クラスのみ中級レベル対象。
- d) 13年度開講時間総計：432時間
- e) 受講料：500円/月

その他の活動：

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

- a) 日本語指導（計7クラス）の実施：「大人の教室」6クラスの他、「子供の教室」を1クラス¹²⁾開講している。
- b) 松江市教育委員会への「指導協力員（日本語）」の紹介
- c) 交流会の実施：外国人との親睦や会員相互の交流を深める目的で、クリスマス会や忘年会などをクラス毎に実施している。
- d) 会員の研修：毎月の例会（年間12回）で会員相互の勉強会を実施している。そのうち3回を毎年外部講師に依頼している。筆者は平成13年度第3回目の講師を担当した。その他に、東京で行われた文化庁の日本語教育大会や広島市、浜田市等で開催された研修に積極的に参加してその報告会をしている¹³⁾。また、毎年1回一泊研修会も実施している¹⁴⁾。
- e) 会報「だんだん通信」の発行

②松江日本語指導ボランティアかけはし

（日本語V登録者56名、13年度日本語指導実績のある会員21名）

設立からの経緯：

松江市国際交流協会主催の新規登録希望者を対象とした「日本語指導V養成研修」修了後にV登録をした日本語Vが、日本語教室を運営する中で生まれたグループである。平成7年8月から日本語教室を開講している。

留学生が受講できる「かけはし」の日本語教室：

- a) 活動場所：松江市国際交流会館内
- b) 活動時期：前期5月から9月末と、後期11月から3月末までの2期に分けて実施
- c) クラス形態と学習者：
平成13年度前期は、5月17日～9月29日に1回2時間（4クラス）で19回実施した。
平成13年度後期は、11月15日～3月28日に1回2時間（4クラス）で18回実施した。
いずれも初級レベル対象のクラス。
- d) 13年度開講時間総計：296時間
- e) 受講料：なし

その他の活動：

- a) 交流会の実施：外国人との親睦や会員相互の交流を深める目的で、学期修了時などに実施している。
- b) 会員の研修：平成13年度には、財団法人松江市国際交流協会主催の「日本語指導V養成講座」に参加した。また、浜田市、大阪府豊中市で行われた日本語V対象の勉強会などに有志計7名が参加した。

③日本語ボランティアいろはの会

（日本語V登録者19名、13年度日本語指導実績のある会員12名）

設立からの経緯：

平成11年9月に、(財)しまね国際センター主催「しまね国際研修館・日本語V養成研修」修了者の有志25名により設立された。出雲市の日本語Vグループ¹⁵⁾に所属している会員もいる。島根

松田みゆき

大学国際交流会館での日本語指導を、平成12年11月から実施している。この日本語指導の開始にあたっては、「いろは」と「だんだん」の連携があったと聞いている。

留学生が受講できる「いろは」の日本語教室：

- a) 活動場所：島根大学国際交流会館 1階ロビー
- b) 活動時期：国際交流会館の学生の移動などの関係上、実施は前期5月～9月と、後期11月～3月に分けられる。
- c) クラス形態と学習者
平成13年度前期は、5月8日～9月25日に1回15時間（4クラス）で20回実施した。
平成13年度後期は、11月5日～3月末日に1回15時間（5クラス）で17回実施した。
クラスはいずれも入門・初級レベル対象。
- d) 13年度開講時間総計：255時間
- e) 受講料：300円/月

その他の活動：

- a) 交流会の実施：留学生との親睦や会員相互の交流を深める目的で、国際交流会館の外で年に2回実施している。
- b) 研修の実施：会員の日本語教育能力を高める目的で会員相互による勉強会を月に1回実施している。

(3) 日本語ボランティアグループの活動の重要性

留学生が松江地域で受講可能な日本語講義等のうち、4分の3（開講時間で換算）を学外の日本語Vグループが実施していることが図1から分かる。また表5は、学習者内訳別に受講登録者数の合計を表したものである。この表を見ると、日本語Vの活動が留学生の日本語教育に果たしている役割の大きさが、開講時間だけでなく、受講者数の点でもはっきりとわかる。さらに、学習者内訳を表した図2～4を見ると、V日本語教室を受講している留学生は、入門・初級レベルで正規の授業への履修資格のないFS4の学生（大学院生、研究生）が最も多く、学内で授業を履修でき、授業に相応しい日本語レベルを有しているFS1の学生（学部生、特別聴講生、科目等履修生）の割合は少ないことが分かる。また今回の調査によると、V日本語教室を受講している特別聴講生と科目等履修生は、正規授業の履修資格があるものの日本語レベルが低いためにニーズに合致しないFS2に分類される留学生であった。V日本語教室の受講者の内訳は、正規の日本語授業を補う目的で開講した日本語補講の学習者構成とほぼ一致する。このことは、図3と図4の受講者内訳から明らかに見て取れる。正規授業で実施されている日本語教育を補う目的で、学内で日本語補講を実施しているが、学内の日本語教育をさらに補完する形で学外のV教室が機能しているという現状が今回の調査の結果から浮き彫りになってくる。

また、これまでのどの分類にも当てはまらない形として、島根大学法文学部外国語研究会と島根大学生協同組合が共催で「日本語講座」を14年度から新たに企画している。その企画段階から筆者は参加しており、最も効果的な日本語講座の内容として、以下のような提案を行った。すなわち、日本語学習の機会が用意されていないFS3に相当する留学生と日本語能力試験1級受験希望者向けの中・上級者レベルの講座内容の実施である。14年度の講師は筆者がつとめる予定で、

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

開講時間総計45時間が計画されている(図1参照)。この講座の開講によって、平成6年に学内で指摘された問題点が全て解消されるわけではないが、多少なりとも留学生に日本語学習の機会を提供できると期待している。

以上のように、留学生の日本語教育は様々な形態で多くの人々の手によって支えられていることが分かった。わけでも、日本語Vグループの活動は、島根大学に留学して来た外国人留学生にとって、今や、なくてはならない存在であると言っても過言ではないだろう。

II：生涯学習としての日本語ボランティア活動

これまでは、日本語Vの留学生に対する日本語教育者としての側面を論じてきた。その活動は日本語の学習支援から始まるが、しかし学習面でのサポートにとどまらない。留学生との交流を通じて、相互の文化理解とともに人間関係の構築が行われている。また日本語Vは、V活動のために自らも学習する生涯学習者という側面も持つ。以下に、それらの側面について述べる。

1. 聞きとり・アンケート調査の実施

松江地域で日本語Vをしている方々の構成や参加動機、活動をする上での様々な問題点や感想などを伺うために、「だんだん」「かけはし」「いろは」に御協力いただいて、平成14年2月にアンケート調査を実施した。アンケート質問項目は、以下の通りである。その結果明らかになった日本語Vの現状について、項目別に分けて順次結果のみ記す。詳細な結果とその分析は、紙幅の関係上別の機会へと譲りたい。

日本語ボランティアの研修に関するアンケート質問項目

性別： 男性 女性

年代： 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代

- 1：日本語指導年数をお聞かせください。
- 2：日本語ボランティアに参加した動機についてお聞かせください。
- 3：日本語ボランティア活動を通じて「よかった」「楽しかった」と思うことはどんなことですか。
- 4：日本語ボランティア活動をしていて「困ったこと」「辛いこと」「嫌なこと」がありますか。
それは、どんなことですか。お聞かせください。
- 5：今、どのような学習者に教えていますか。
- 6：今後、日本語ボランティアの研修は必要だと思えますか。 はい いいえ
- 7：研修をするとしたら、どのような研修内容がいいと思えますか。番号に をつけてください。また、特に興味をお持ちのものには をつけてください。(複数回答可)
a) 日本語に関する知識 b) 日本語の教え方 c) 社会学 d) 外国語
e) 地域事情 f) IT g) その他
- 8：研修の仕方は、どのようなかたちで実施したらいいと思えますか。
その他なんでも研修に関するご意見をお聞かせください。

松田みゆき

アンケートへの有効回答数は、計35名（内訳は「だんだん」15名、「かけはし」11名、「いろは」9名）であった。男女比は、男性3名、女性32名。年齢層は、20歳代から70歳代までであった。

（１）経験年数

日本語V経験年数は、平均4年であった。1年未満の経験のVから、10年以上の経験を持つ日本語Vまでいた。10年以上の経験者は、2名いて、松江市外での経験年数も含まれている。それぞれの日本語Vグループは、設立経緯によって構成会員の経験年数に差がある。経験をこれから積んで行こうとしている若いグループ「いろは」に対して、「だんだん」「かけはし」は、経験豊かな会員がいる一方で、経験の浅い会員も擁している。グループ内での日本語指導力の差が生じ、研修の必要性が求められているのは、この会員構成に起因するのではないだろうか。日本語Vの経験年数は、各Vの設立経緯、運営方針によるところが大きい。

（２）ボランティア参加動機

Vに参加した動機については、大きく次の4つに分けられた。すなわち、交流、学習、社会参加・社会貢献、その他である。

そして、そのいずれの回答の場合も、V参加動機として、自分自身の「生きがい」に通じる要素が見受けられたのが特徴であった。

「交流」と回答した日本語Vのなかで、外国人との交流に限定した回答は少なく、日本人も含めた交流を求め、そこに自己実現の場を求める声が多かった。「いろいろVはありますが、自分も学習しなければいけないものなので、やりがいがありそうだったから」という自分自身の学習の機会としてとらえている回答が多かった。中には、「日本語教師になるための実践的な勉強として」という島根大学の日本人学生が1名いた。さらに、「外国で御世話になった経験」や「退職」などをきっかけとして、「社会参加、社会貢献したい」という回答も多かった。

「老化防止」「老後の何か生きがいのようなものを求めて」という回答も2件あった。

日本語V活動を通して、生涯学習が促進され、それが高齢者の人材活用に繋がっているという点で、注目すべき参加動機であると考えられる。

（３）日本語ボランティアをやってよかったこと楽しかったこと

交流を通して学習できること、自分自身が学習できること、貢献、の3つに分類できた。日本語Vの活動は、日本語指導者と学習者の関係として向かい合うことから始まる。その活動の過程で、双方がコミュニケーションをとろうとするうちに、互いに影響しあって交流が進み、それに伴って様々な学習成果が挙がる。日本語Vの活動現場は、異文化接触の場であり、また、文化衝突、文化変容の場でもある。交流を通じて自らが成長して「学習」したと感じたり、教える目的のために「学習」することに喜びを見い出したりするなど、自己研鑽に対して日本語V活動の意義を見付け出していることが分かる。交流によって得られる学習は、外国人学習者との関係にとどまらず、「仲間と同じ目的と一緒に活動しているといろいろな壁があってもそれを乗り越えることができる」という言葉に代表されるような日本人との交流について言及している回答も多かった。「学習者の日本語が上達すること」「日本語ができなくて困っていた学習者に笑顔

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

が戻ったとき」など、貢献できたことへの喜びも多く聞かれた。

その他、「自分もアジアの一員であるという気持ちが生まれたこと」「母語、文化が違って、一人一人同士の間で人間交流ができる喜びを与えられる」という自分自身のアイデンティティに関わる意見もあった。

(4) 日本語ボランティアをやっていて困ったこと辛いこと嫌なこと

「日本語 V をやっていて困ったこと辛いこと嫌なこと」は、以下のように分類された。

まず、勉強不足とそれを補う勉強の機会が不足していることである。勉強の内容は、日本語教育にとどまらず松江地域に住む外国人に纏わるあらゆる問題に関する知識などにおよんでいた。

次に学習者の受講マナーなどについての問題点が挙げられていた。グループ運営上の問題（人間関係、ハードの問題）、仕事や家事など他の生活とのやりくりに関する個人的な問題も挙げられていた。「学習者と価値観に大きなずれがあり、誠実さが無い場合は V で対応が難しいと感じる」「V 活動について周囲の人の理解が得られないとき」などである。

「仲間との日本語学習についての意見交換の場がない、また時間が少ない」など、日本語 V グループ内の人間関係も問題点として挙げられていた。「V の仲間が少ないうえに移動が多く、計画を立てにくいこと」など、日本語 V 運営上の問題点についての言及もあった。

教室環境の問題として、「一部屋で複数のグループが一緒に授業をすると声が聞こえにくく、みんなが大声を出すようになり困る」という意見もあった。

その他、「研修のための足代、資料、本代などの負担が大変」「若いので、学習者が年上のとき立場が難しい」「行政担当職員のサービス精神が欠けると感じる」などの回答があった。

(5) 研修の必要性について

35名全員の回答が、研修を望む回答であった。

研修の時間：研修の期間や時間についての希望はそれぞれの日本語 V の仕事や生活上の事情によって多様であった。平日か週末か、昼か夜かなど、希望は分散している。

しかし、長期にわたって継続的にやりたいというのはほとんどの意見であった。

研修内容：希望する研修内容については、以下のような結果が得られた。また、数値は回答数（複数回答、 を 1 点、 を 2 点として換算）を表している。

- | | |
|-----------------|---------------|
| a) 日本語に関する知識：28 | b) 日本語の教え方：32 |
| c) 社会学：25 | d) 外国語：23 |
| e) 地域事情：25 | f) IT：10 |
| g) その他：7 | |

「a) 日本語に関する知識」では、V 教室ですぐに役に立つ知識を教授法と関連付けて学びたいという回答があった。その一方で、日本語 V 活動に関係なく、文法に関する日本語史、音声学、文字表記の国語施策などを体系的に学習する機会を欲する回答があった。

「b) 日本語の教え方」をほぼ全員が希望していた。日本語の教え方では、現実に即した授業研究、授業準備の方法などが求められている。

松田みゆき

また、現在はV日本語教室の授業内容の中心は入門・初級であり、中級は「だんだん」が1クラス開講しているだけである。上級のクラスは全く開講されていない。しかし、FS3の留学生や他の中級レベル以上の学生からの要請に応えたいという考えから、中・上級を教えるための研修や、日本語能力試験対策用の教授法についての研修も望まれている。

さらに、日本語Vグループ内で経験の少ない会員が研修するとともに新たな会員を発掘するための日本語Vの養成研修が求められている。研修を待ち望んでいながらその機会に恵まれない日本語V、あるいは日本語V希望者は潜在的に相当数いると推定された。

「c) 社会学」は、多文化共生社会、あるいは異文化間コミュニケーション、文化人類学についての講義を望む回答が多かった。これは、V日本語教室の地域における意義や、日本語Vが活動上遭遇する文化接触について客観的に社会科学の視点から捉えたいと望む学習要求の現われであると考えられる。

「d) 外国語学習」では、学習指導に必要な教室用語や簡単な会話を中心にした入門コースを希望する回答がほとんどであった。中国語、韓国・朝鮮語、英語、ポルトガル語の順に希望者が多かった。

「e) 地域事情」は、V日本語教室に来ている学習者の国を中心に歴史、政治、宗教、経済、地理などに関する知識を得たいという意見があった。それと共に、日本文化・日本事情についての研修を望む声が多かった。

「f) IT」に関しては、他の研修項目ほど希望者が多くなかった。その理由には以下の3点が予想される。まず1番目に、回答者の日本語Vのうち、50歳代が7名、60歳以上が8名含まれていて、コンピュータやワープロのキーボードやモニターを敬遠する向きがあるのではないかとということである。2番目に、日本語Vグループの活動には、日本語の学習の基本は顔と顔を合わせて時間を共有することから始まるという理念があり、それは少人数の教室活動をしている日本語Vの基本姿勢でもあることからITへの関心が薄いのではないかと思われる。3番目に、IT研修を受けることによってその教室活動に具体的にどのような良い点があるのかということがはっきりとイメージできないのではないかとということが挙げられる。

「g) その他」

Vの在り方やVとはそもそも何なのかについて「V論」の講義を受けたいという回答が3件あった。「在留資格を中心とした在住外国人と法律」に関する知識を得たいという希望者も2名いた。人間関係を学びたいという考えから「教育心理学」「心理学」という回答もあった。その他に、授業見学や他の地域のVグループとの視察交流の企画を望む声もあった。

以上のような結果を総合的に判断すると、日本語V活動をする上で求められている研修には、「日本語教育」の教育内容や、教授法をはじめ、その他多分野に渡る内容が含まれていることが分かる。これは、「日本語教育」によって外国人の日本語学習支援を行うということが日本語Vグループの活動の中心であるものの、言語教育は文化やその話し手のバックグラウンドと切り離して扱うことができないために、V活動を続ければ続けるほど新たに学ぶべきことが新たに現れてくることを意味している。これは、日本語Vの生涯学習者の側面である。また、「日本語教育」活動の根底に流れる精神が、「同じ地域に住んでいる隣人として困ったことがあれば積極的に力

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

になろう」と考えて行動しようとする V 精神であるために、さらに広く社会システムや人間の心に関わる学習の必要性が益々生じて来るのである。こうした必要性を背景として、日本語 V 活動の先進地域で開かれている V 研修では、日本語教育の専門家だけでなく、精神神経科医師、カウンセラー、弁護士、法律学者、社会学者、地方自治体国際交流担当職員及び福祉担当職員など実に多方面の専門分野から講師を招いて実施されている¹⁶⁾。

おわりに

日本語ボランティア研修の今後の展望

- 島根大学公開講座からのサポートの可能性を求めて -

これまでに繰り返し述べてきたように、日本語 V の方々は、留学生にとって地域の有力なサポーターであると同時に、V 活動のために自らも学習する生涯学習者でもある。筆者は、島根大学が公開講座などにおいて日本語 V の方々へのサポートを実施することに大きな意義があると考えて、具体的に以下に掲げる 4 つの提言をしたいと思う。

1. 公開講座の実施（大学教官、留学生、日本語ボランティアによる）
2. 学内での日本語教室の実施
3. 図書館など施設の開放
4. 学生ボランティアとの連携

1. 公開講座の実施

大学審議会の答申（平成10年10月）によると、地域社会との連携・交流推進の意義として「大学と地域社会や産業界の連携・交流の強化を図ることは、大学がその知的資源をもって積極的に社会の発展に貢献するために極めて重要である。また、これにとどまらず、社会との連携・交流を通じて大学の教育研究が活性化することにもつながるものである」と書かれている¹⁷⁾。また文化庁では、地域社会における外国人の日本語学習支援を充実させるためには、地域住民や民間 V 団体、行政、教育機関などの相互理解とネットワーク化が重要になってきていると判断している。そして、「共に育む場の創造」が必要であるとし、それを目指して「地域日本語『共育』」という研究領域確立の必要性を提唱している¹⁸⁾。以上のような要請に応えるためにも、島根大学は積極的に松江地域の日本語 V グループと提携してはどうかと筆者は考えている。

例えばまず、日本語 V を生涯学習者にとらえて、公開講座において日本語 V として活動中の方や希望者を対象とした講座を企画することが考えられる。こうした講座を開講することは、先に引用した答申や文化庁の提唱に対する一つの答えになるであろう。

一方、日本語教育学会ネットワーク調査研究委員会は、「地域における日本語教育に関する提言」¹⁹⁾の提言 3～7において、多文化共生地域社会の実現のために、日本人と外国人の「対話」の必要性を述べた上で、「対話」は相互理解を目指した相互学習によって生まれ、そして V 日本語教室は日本人と外国人の相互学習の場として捉えるべきであるとしている。そして、日本人と外国人の対等・平等な関係のもとで相互学習をすすめ、外国人の参加を積極的に求めるべきであるとしている。こうした考えに沿った対応として、例えば公開講座の講師に留学生など松江在住

松田みゆき

の外国人を登用することが考えられる。あるいは、日本語 V の方に活動報告の講演会などを依頼してはどうだろうか。

2. 学内での日本語教室の実施

さらに留学生の日本語教育の場として、大学を広く開放することを筆者は提案したい。今回行ったアンケートに対する回答の中には筆者の提案に比較的近い「研修の望ましい方法」について書いた日本語 V の意見があった。長文ではあるが、以下に原文のまま引用しておく。

「島根大学の留学生がこの松江で勉強なさる際のお手伝いが出来ればうれしいと思っています。実際には、一人の留学生が3つのVグループの教室を複数受講していることも多いです。それぞれのグループに良し悪しがあり、留学生にとって満足できるものではないかも知れません。大学は、そのような留学生に日本語の勉強の機会を提供するべきだと思います。大学の中の教室を提供してもらって、松江のVグループのメンバーが協力してローテーションを組めば出来るのではないのでしょうか。また、大学の教官がもっていらっしゃる知識を是非我々にも学ばせてほしいです。留学生を講師として語学の勉強をさせてもらうのはどうでしょうか。ギブアンドテイクですれば、いいかもしれません。大学の開放と教授の皆様のご協力が必要だと思います。」

ここに書かれているのは、留学生の日本語教育を合理的に有効に行うためのアイデアである。さらに大学の知的財産を共有させてもらいたいという希望をギブアンドテイクという言葉で表現している。これは、相互学習と交流の希望であると受け取られる。

このアイデアのように日本語教室を学内で実施している例が、身近には鳥取短期大学にある。日本語 V のローテーションを決めて、ウィークデーの午前中に大学の建物を使用して日本語教室を開いている。

3. 図書館など施設の開放

松下達彦(1999)²⁰⁾は、Vグループが非営利組織であることから、リソース不足が問題となるところといたうで、人的・物的リソースの提供に大学協力の意義がある、と指摘している。

前述の日本語 V の意見は、まさにこのV日本語教室を運営する上で日本語 V が必要しているリソースを大学に提供してもらいたいという意見である。筆者は、この回答者の他に数名の日本語 V に聞きとり調査をした結果、日本語 V が大学に期待するのは以下のリソースであることが分かった。

まず、活動の場所としての教室、豊富な教材を閲覧できる図書館、インターネットの使用など主に施設があげられた。次に、人的なリソースとしては、広報活動とそれを担当する留学生係、教え方のアドバイスや何をどう勉強していけばよいか相談できるようなアドバイザー、カウンセラーとしての教官、新しい仲間になってくれる島根大学の学生などが挙げられた。またその他にも、学習者のための託児室とVのベビーシッターの必要性を挙げる意見もあった。

4. 学生ボランティアとの連携

以前、「だんだん」の活動を行う際に乳幼児連れの学習者のために島根大学の教育学部の学生がVでベビーシッターをしたことがあった。しかし、長続きせずすぐに辞めたという経緯が

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

あり、自由意志で始めるVの責任について、島根大学の学生が学ぶ機会としても、学内の施設で日本語教室を実施する意味があるという意見が日本語Vから聞かれた。

以上述べてきたことを有機的に組み合わせて実施すればさらに効果的であろう。もちろん学内での人材確保など、クリアしなければならない問題点は少なくないが、早急に解決して実施することができれば大きな効果が期待できる。

ただし、こうした連携を行う際に忘れてならないのは、日本語Vグループの自主性を尊重するという点である。アンケートには次のような意見もあった。「自分たちが自主的に出来るのが一番いい。用意された研修の機会も大切ですが、みんなでその必要性を共通理解の上でやるのが楽しいのです」「ひとりで、ぼつぼつと活動しながら勉強していくということにも意味があるのではないのでしょうか。でも、それは、よく言えば『個性的』や『ひとりよがり』になります。人に教えるためには、熱意や善意だけではすまされません。ですから、基礎的な学習の機会が欲しいのです。シリーズで継続的な講座・勉強会をしていただけたら有り難いです」こうした意見があることを忘れてはならない。

本稿を終えるにあたり最後に、平成6年の学内での提言を引用しておきたい。この提言は、島根大学の日本語教育が抱える現在の課題をそのまま指摘していると実感させられる文章である。少々長いが、原文のまま引用する。

「国際交流が、本学の発展にとって豊かな実りをもたらしてくれることは、もはや疑う余地がない。今まではややもすると各学部や個人の努力、それに事務部の掛け持ち負担等を頼りにしながらの国際化であったが、そろそろ、財政基盤の飛躍的充実を含め、大所高所から国際化を考慮促進する新しい枠組み作りについて検討する必要があるといえよう。留学生担当教官、事務組織を充実するとともに、教官、事務官、留学生はもとより、市民、V、ホストファミリー、チューター等も網羅する『インターナショナルセンター』構想のような大きな枠組みについても検討を始める時期にきているといえよう。もちろんこの新しい枠組みは、学部や個人の独自性を損なうようなものであってはならない。むしろ独自の創意や工夫や努力を励まし援助するようなものでなくてはならないことはいままでもない。」²¹⁾

筆者が本稿に於いて行った提言が、松江地域における留学生と、彼らに関わる多くの人々に多少なりとも貢献することができれば幸いである。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、「日本語ボランティアグループ“だんだん”」の脇田隆会長と宮川澄子氏、「松江日本語指導ボランティアかけはし」の渡部律也会長、「日本語ボランティアいるはの会」の江角薫子会長と藤井昌美氏には、聞きとり調査や資料提供などで大変お世話になった。また、学習者の指導に情熱を傾け、自らも学習意欲と向上心に溢れている日本語Vの皆様方全員に心からの敬意を表したい。快くアンケート調査に御協力くださりまして本当に有り難うございました。

ここに記して各位への感謝の気持ちを表したい。

松田みゆき

注

- 1) 筆者がこれまでに講師をつとめたのは、以下の研修である。
 - ・平成12年9月「日本語ボランティア育成研修 出雲地域」
(財)しまね国際センター主催、全4回、20時間
 - ・平成12年10月「日本語ボランティア育成研修 石見地域」
(財)しまね国際センター主催、全4回、20時間
 - ・平成12年11月「松江日本語指導ボランティア養成講座」(財)松江市国際交流協会主催、全4回、12時間
 - ・平成13年2月「月例研修会」日本語ボランティアグループ“だんだん”主催、3時間
 - ・平成13年9～10月「松江日本語指導ボランティア養成講座」(財)松江市国際交流協会主催、全4回、12時間
 - ・平成14年2月「月例研修会」日本語ボランティアグループ“だんだん”主催、3時間
- 2) 学生数は、島根大学留学生係提供『留学生名簿(2002年1月1日現在)』による。
- 3) 島根大学『島根大学の現状と課題(Ⅲ)開かれた大学教育の実現をめざして』1994年、p.188。
- 4) 島根大学『島根大学の現状と課題(Ⅲ)開かれた大学教育の実現をめざして』1994年、p.190。
- 5) 筆者が担当した授業については、履修者名簿によるデータに基づき作成した。片寄講師と増永講師が担当した授業については、島根大学教務課提供の学内Web「受講者名簿」による。学部研究生1名が、前期に6つの講義を受講しているが、これは同一人物である。本来、学部研究生の大学授業の受講は認められていない。
- 6) 島根大学『授業計画書(基礎教育科目、共通教養科目、専門基礎教育科目)』2001年、pp.349-352。
- 7) 正規授業の履修資格を持たないFS3、FS4の学生が、聴講することが島根大学では慣習化していた。事実、13年度前期の筆者の授業には、FS3とFS4に相当する留学生が多数出席してきた。面白そうだからという理由で次々と学生が訪ねて来た結果、「日本語ⅠA」は、本来の履修登録者15人の授業に対して延べ27人、「日本語ⅡA」は、14人のところ延べ36人、「日本語ⅡB」は、17人のところ延べ35人が出席してきた。これらの留学生の中には、単位取得の必要がないために、責任ある受講態度をとらない者が多くいた。このため、正当に履修した学生が適切な環境で授業を受ける権利を守ることが難しくなることもあった。授業関係者らに問い合わせたところ、このことはかねてより日本語の授業では問題となっていたとのことであった。留学生係によると、私費留学生にとってこのような状況は、金銭的な面からもアンフェアであるとの批判もあったために、関係各処担当者の判断によって、13年度後期からは、全ての日本語・日本事情の講義で履修資格のない留学生の聴講を認めないことが決定された。
- 8) 松田みゆき「島根県立大学交流県留学生への日本語教育の必要性と今後の課題」『島根県立大学交流県留学生松江日本語研修』報告』『総合政策論叢』第3号2002年、pp.93-120。
- 9) 13年度の補講を実施するにあたって、筆者も講義の一部を担当したが、主に学外の3人の先生方に御協力いただいた。この先生方は、全て12年度、13年度の島根県立大学留学生に対す

島根大学留学生の日本語教育の現状と課題

- る日本語研修を担当された先生方である。この先生方は現在「だんだん」「かけはし」「いろは」に所属している。
- 10) (財) 松江市国際交流協会では、「日本語指導ボランティア」と呼ばれている。
 - 11) 脇田隆「地域における年少者の日本語教育 今、日本語教師に求められるものは？」『日本語教育学会研究集会第8回中国地区研究集会予稿集』2000年、pp 32 - 36。
 - 12) 本稿では、留学生に対する日本語教室を中心に述べるために、「だんだん」が行っている年少者に対する日本語指導活動に関しては扱わない。本稿におけるクラス数、受講者数などのデータは全て「大人の教室」のデータのみである。
 - 13) 錦織陽子「体全体で受け止めた！ 『文化庁日本語教育大会』に参加して」『だんだん通信』創刊号2001年、p 4。
 - 14) 長森哲子「サンレイク泊研修」『だんだん通信』第2号2002年、p 6。
 - 15) 出雲市のボランティアグループの日本語教室は、一般市民のブラジル人、中国人の受講者が多いが、なかには、島根医科大学留学生の受講もある。大学統合後のことを考えると、今後、出雲地域の日本語ボランティアグループとの関係も視野に入れる必要があると考えられる。
 - 16) 日本語ボランティア講座編集委員会『いま！日本語ボランティア「日本語ボランティア講座（東京）」』凡人社1996年、pp 204 - 406。 / 日本語ボランティア講座編集委員会『いま！日本語ボランティア「日本語ボランティア講座（山形）」』凡人社1996年、pp 202 - 206。
 - 17) 大学審議会『21世紀の大学像と今後の改革方策について 競争的環境の中で個性が輝く大学（答申）』1998年、p 89。
 - 18) 野山広「地域社会における日本語学習支援方策の展開 共に育む場の創造を目指して」『2001年度日本語教育学会秋季大会予稿集』2001年、pp .139 - 144。
 - 19) 日本語教育学会ネットワーク調査研究委員会「地域における日本語教育に関する提言」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究 最終報告』日本語教育学会2000年、pp .190 - 202。
 - 20) 松下達彦「外国人のためのソーシャル・サポート・ネットワークにおける大学教職員・大学の位置付け 日本語学習支援などの具体的支援策」『国際学レビュー』桜美林大学、第11号、1999年、pp 25 - 47。
 - 21) 島根大学『島根大学の現状と課題（Ⅲ）開かれた大学教育の実現をめざして』1994年、p 213。